

研究主題

社会の変化に対応する望ましい修学旅行の在り方の研究
 — 望ましい人間関係をはぐくむ安全で楽しい修学旅行 —

修学旅行特別委員会

1 はじめに

学習指導要領では、学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してより良い学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てることを目標としている。

特に旅行・集団宿泊の行事においては、平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこととしている。

各学校の修学旅行では、分散学習や体験学習を積極的に取り入れ、望ましい人間関係をはぐくみながら社会性や豊かな情操を育成するために実践してきた結果、分散学習や体験学習の場所や活動内容は年々多様化してきている。

一方で、地震防災対策を進める中、通り魔事件や昨年度の新型コロナウイルスのような伝染病対策など、新たな安全対策・マニュアル作りの必要性とともに、修学旅行の安全についての関心も高まった。

そこで、本委員会では全県で実態調査を実施し、「望ましい人間関係をはぐくむ」「安全で楽しい修学旅行」という2つの視点から、望ましい修学旅行の在り方について研究を進めた。

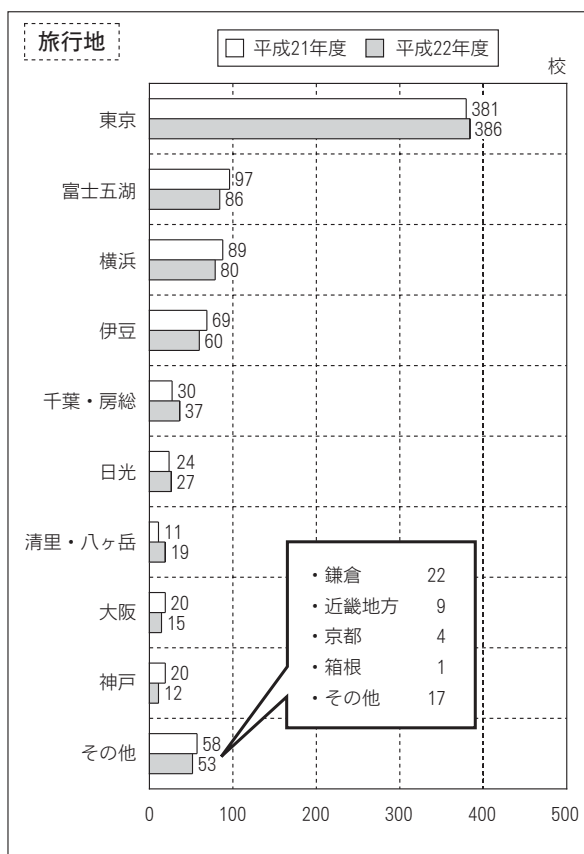
2 調査・研究の内容

県内の全市町村立中学校に約30項目の調査を依頼し、修学旅行の実態を把握し、その内

容を検討する。実態調査は修学旅行が終了した7月上旬にアンケートを依頼し、夏季休業中に実態をまとめ、分析・研究を進めていく方法をとった。

3 調査の結果

(1) 旅行地について



旅行地のベスト3は、東京・富士五湖・横浜とここ数年変化はない。しかし、関西方面を訪れる学校は減少傾向にあり、中部地方を訪れる学校は若干増加傾向である。

(2) 望ましい人間関係をはぐくむ

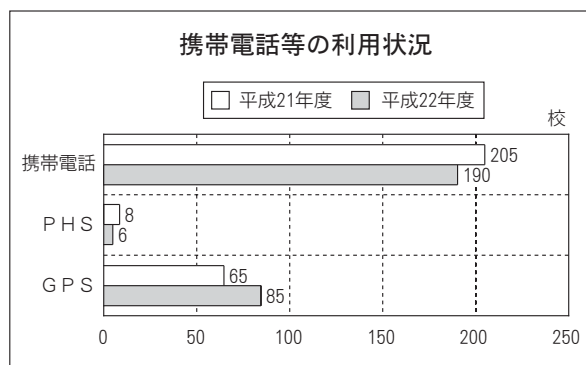
分散学習や体験学習の準備は、1年生から行っているという学校が11校あり、約半

数強の222校は3年生からの実施である。また、2年生の3学期から行っているという学校は150校と全体の37%という結果であった。どの学校も事前学習や事後学習は「総合的な学習の時間」に位置付けられ、生徒の主体的な取り組みがなされている。また、ほとんどの学校では班編成を行い、グループ別行動を主に計画されている。それぞれが自主性をもち、主体的に活動内容や行動日程を決め、互いに協力して目的が達成できるよう準備を進めている。

分散学習を取り入れている学校は387校で、全体の95%を占め、体験学習を取り入れている学校は299校で、全体の73%に当たる学校での実施であった。主な体験場所は、過去3年間変わらず、富士五湖・東京・伊豆が上位を占めている。体験学習の内容としては、探検・スポーツ関係、工芸・食物作り、漁業・漁村体験等多種多彩である。生徒の興味関心に基づいて、生徒自らが主体的に選択し、平素と異なる環境だからこそその体験が増えている。体験学習、分散学習への生徒の取り組む姿勢は、ほぼ全校が「意欲的に取り組めた」「まずまず意欲的に取り組めた」と回答している。

(3) 安全で楽しい修学旅行

安全面で解決されると良いと考えている中で、引率・下見の人員増にかかわる予算の増額をあげている学校は全体の57%に当たる230校であった。これは、分散場所や体験場所が複数となり、引率教員の数不足するという現状や地震等防災対策・事故防止対策等をより確かなものにしたという願いからである。また、昨年度問題となった新型インフルエンザ対策に対応して、伝染病患者発生時の対応策や延期あるいは中止した場合のキャンセル料、それに付随する旅行保険契約内容にも関心が高まっている。



本年度の生徒の携帯電話等の利用は281校だった。これは全体の69%で、年々確実に増加をしている。また、費用負担の問題もあるが、グループの位置を確認できるGPS機能付携帯電話をもたせた学校は全体の21%に当たる85校あり、こちらも年々増加傾向にある。緊急時に対する意識が高まっていることが伺える。

4 成果と課題

年々体験学習を修学旅行に取り入れる学校は増加している。その質・量共に多様化し、充実したものとなり、生徒も主体的に取り組む成果を得た。しかし一方で、天候によっては実施できなかったり、金額的に高額になったりする体験学習もあり、選択方法に課題が残った。

また、分散学習や体験学習の事前学習においては、インターネットを利用して資料が集まらなかったり、学習時間が不足したりしている。平成24年度から実施される新学習指導要領は、1年生50時間、2・3年生70時間と総合的な学習の時間数が大幅な減少となる。3年間を見通した学習計画が今後の課題となるろう。

5 おわりに

望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、生徒自らが主体的に活動できる安全で楽しい修学旅行となるよう、新しい課題に対応しつつ、関係機関の協力を得ながら一層の努力をしていく必要がある。